

アルツハイマー病 薬効を簡易測定

阪大 ペプチド比から判断

大阪大学の大河内正康
講師らは、アルツハイマ
ー病の治療薬候補の効果

を、リアルタイムで定量的に調べる簡便な手法を開発した。病気はたんぱく質断片（ペプチド）の「アミロイドβ」が脳内に蓄積して発症するが、同時に作られる別のペプチドの割合を測ることで薬効を調べる。動物実験で薬の評価に使えることを確かめた。今後、早期の普及を目指す。

実際に働く酵素が別のペプチド「APL1β」も作るのに注目。脳内に蓄積しないこの物質の脳脊髄（せきずい）液中に占める割合の変化と病気の進行が一致した。

ヒト脳神経細胞の培養実験では、アルツハイマー病を招くタイプのアミロイドβが作られる割合が高いと、それに比例してAPL1βの割合も高まった。滋賀医科大学の西村正樹准教授と協力し、カニクイザルに治療薬候補を投与すると、脳脊髄液中のAPL1βの割合が減った。新たに作られるアミロイドβの割合が下がったとみなせ薬効評価などに応用できる。

平成22年10月25日朝夕

中日
産経
京都
読売
毎日
朝日